第6章　二〇〇号記念　爽樹合同歌集より

以下、『爽樹合同歌集』（二）発行のご挨拶　を一部を引用。

平成九年四月に創刊した「爽樹」は同十七年七月に百号と、その記念「合同歌集」を発行致しました。その後八年会員一同が目標にした二百号発行が目前に迫り、それを記念して再び「合同歌集」を編集することに致しました。

今回は一人に二十五首ずつで、計二十七名の方からお寄せ頂きました。この歌集を手に取ると会員夫々の思い出が蘇り、特に物故会員の歌には胸をつかれる思いを致します。ここに「爽樹」は二百号の山を越え、更に次の目標に向け努力したいと思って居ります。

最期に「合同歌集」発行にご協力頂いた会員の皆様と編集委員に厚く御礼申し上げます。勉強の資として役立てて頂ければ更なる喜びです。

平成二十五年十一月　　爽樹短歌会代表　　横田英夫

老いし日々（木寺　良子）

爽樹二百号、そして記念の第二巻目の合同歌集の発行まことにお目でとうございます。
会員の皆様と共にこの時を迎えることが出来まして心より嬉しく思います。いよいよ老年の後半に入る年齢になりますが、短歌を味わい、短歌を作れることのしあわせを、しみじみと感じる様になって来ています。これからも、これまでと同じようでも、私らしい歌を作れるように努力したいと思います。

古き葉をみな振り落とし樫の木の若葉ふんわり新樹になりぬ

ひっそりとシャリンバイの花咲きをれどその香匂へり五月の庭に

この日暮れ夕焼け空のひろがりて杜鵑（ほととぎす）遠くしきりに鳴く声

泰山木咲くを仰げば偲ばるるまみえしことなく師は逝きませり

腰痛にこもり居れども日々に仰ぐ泰山木の白妙の花

沼ひとつ隔てて帰りゆく子らの車見ゆれば庭より手を振る

少しだけ窓開けられて六階の病室にとどく朝蝉の声

入院のわれを見舞ひて帰る夫が握手うながし手をにぎりたり

子らと来て眺むる秋の海原に淡き島影「壱岐ならん」と聞く

去年の今日退院せしと思ひつつ朝の厨に胡瓜切りをり

糠漬けの茄子の色よし老いふたり向き合う卓に今朝も並べぬ

夫婦で弟妹が住む東京旅行
（鬼怒川温泉など、平成８年）

同じく東京旅行時（平成８年）

弟らと（平成 14 年）

夫の米寿のお祝い（平成 21 年）

長男の還暦（平成 22 年）

次男の還暦（平成 24 年）

裏庭で（平成 24 年頃）

老いたれどまだ二人にて裏庭に冬の野菜の種播く今日は

征(ゆ)きし日もありて命を守り来し夫(つま)なり米寿を今日迎へたり

米寿なる夫と並びて六十年共に経し日を子らに祝はる

実の生るを共に待つなりさくらんぼの苗木を老し二人が植えて

リハビリに行く車より秋晴れの海眺むれば沖はかすめり

デイケアの今日のひととき訪れし生徒らと歌う唱歌「ふるさと」

逆光にシルエットなす前山の木立に透けて秋の日は落つ

八十路にて同期の会は最後とふ記念の写真送られて来つ

老いし身の衰え言ふも庭畑に夫の動けり秋の陽(ひ)浴びつつ

ひとしきり鵙(もず)の声せり雨かとも思ひし空の晴れわたりゆく

金色の塔現れしごと黄葉の大公孫樹(いちょう)立つ沼の向こうに

柊(ひいらぎ)の樹の仄白く見ゆるまで小花咲き満ち匂ふ夕暮れ

わが庭の年経しひいらぎ葉のとげの自づと失せつつ花の香高し

老い二人そろそろ動きて野菜苗植うる畑にさくら散りくる

父・政平 49 回忌法要時（平成 22 年）

小川家 4 姉妹（平成 22 年）

正月の一コマ（平成 27 年元旦）

ひ孫たちと（平成 26 年）

小川家集合（平成 30 年頃）